

## 論文の内容の要旨

論文題目 20世紀におけるメディアウム概念の成立と変容—マクルーハンとギブソンの比較研究

氏名 柴田 崇

今日、メディアウムの概念は、送信者からのメッセージを受信者に媒介するという内包と、音声言語を運ぶ媒質から情報を保存する様々な装置やマスメディアのような大規模な機構に至る外延を持つ。このようなメディアウム概念は、直接には1948年に登場したC・シャノンとW・ウィーバーの通信モデルに由来するが、通信モデルが通信技術の定式化である以上、電信が実用化された19世紀後半頃に源流があると考えるのが妥当である。通信モデルは、いわば源流を奔流に変え、媒介するメディアウムの概念を成立させるはたらきをした。20世紀半ばに成立したこの概念は、通信技術に基づく様々な工業製品が産出される時代背景とR・ヤコブソンによる言語モデルへの転用に後押しされて一般化した。

媒介するメディアウムの概念が成立して一般化し始める時期、この流れに逆らう動きが生じた。一つはM・マクルーハン、もう一つはJ・J・ギブソンによるものだった。二人は、通信モデルに批判的な立場からメディアウム概念に異を唱えただけでなく、環境と身体とからメディアウム概念の変容を企てた点でも共通していた。とはいえ、具に検証すると、通信モデルに対する二人の批判の焦点は重ならず、必然的に二人のメディアウム概念は異なる内包を持つ。

まず、マクルーハンの批判の焦点は、「メディアはメッセージ」のテーゼに集約される。通信モデルのメディアウムは、情報源で発せられたメッセージを目的地で正確に変換する機能を担う要因を指すので、変換過程にあるすべての要因がそれに該当する。メディアウムは「メッセージはメッセージ」の等式を保証する諸要因であると言い換えられる。等式を保証する以上、メディアウムが

変換以外の機能をしてメッセージに干渉することは許されない。メッセージへの何らかの付加(または削除)はノイズと見なされ、ノイズが発生するとすぐにメEDIUMの変換機能の不備が問題になる。メディアは、メッセージを正確に送り届ける「透明」な存在か、好ましくないノイズの発生源のどちらかでしかない。いずれの場合も、メディアにはメッセージの内容への干渉が禁じられる。ここから、「メディアはメッセージではない」というテーゼが導きだせる。「メディアはメッセージ」は、使用者にとってはメディアが重要であること、つまり「メディアこそがメッセージ」であることを主張し、「透明」な通信装置にも固有のメッセージがあることを言うものだった。マクルーハンの批判の焦点は、通信モデルがメEDIUMの透明性を謳った結果、メEDIUMのメッセージ、あるいはバイアスを無視した点にあったと言える。マクルーハンは、通信装置だけでなく、道具や機械などの人間が使うすべてのものに固有のメッセージがあるという考えから、メEDIUMの外延をすべての人工物に拡大した。

他方、ギブソンの批判は、メEDIUMの変換機能に向けられた。発信源のメッセージは、メEDIUM中を伝わる際にシグナルに変換される。シグナルは通信の便宜に基づく無意味な信号なので、受け手にとって有意味になるには目的地で再びメッセージに変換される必要がある。ギブソンは、通信モデルのメEDIUMの機能を「媒介」と呼び、「媒介」するメEDIUMで生物の視知覚を説明しようとしていた同時代の心理学説に異議を唱え、代わりに「伝達」するメEDIUMを提出した。光源から発した直射光や鏡面がつくりだす反射光と違い、肌理のある面に反射した包囲光には面を特定する情報(不変項)が含まれる。生物の視知覚は、包囲光がそれ自体で有意味な不変項をつくり出し、メEDIUMが不変項を伝達することで可能になる。この時、メEDIUMは有意味な情報をそのまま伝達しているので、目的地での再変換の必要はない。さらにギブソンは、生物の知覚は、情報の伝播を待つのではなく、移動によって変化をつくり出し、変化の中の不変の情報の探索を常態とする行為だと考えた。ギブソンの視知覚研究は、視覚情報の伝達と生物の移動を可能にするメEDIUM概念を提出した。地球上で二つの要件を同時に満たすのは、空気と水しかない。ギブソンは、物質とメEDIUM、そして、両者を分ける面で環境が形成されていると考え、一般にメEDIUMと見なされる道具や機械を物質に分類した。ギブソンのメEDIUMは、発信源の情報を目的地に正確に伝達する。「メッセージはメッセージ」の等式が成り立つ点は通信モデルと同じだが、等式を保証するメEDIUMの機能はまったく違う。ギブソンのメEDIUMの透明性は、正常な変換機能ではなく、変換せずに情報を伝達する特性に求められるからである。

マクルーハンは変換装置を指していたメEDIUMの語を転倒させるために変換装置以外の人工物を含めるところから出発し、ギブソンは視知覚研究の結果、情報の伝達と生物の移動を可能にするというメEDIUMの定義を手に入れた。そして、マクルーハンのメEDIUM概念はすべての人工物を含み、ギブソンの概念は空気と水に限定された。メディア論がメEDIUMの定義をめぐる議論に終始する論争ではなく、道具がそれを使う人間に及ぼす影響の研究ならば、ギブソンの

思想は、「探索の原理」を公分母にマクルーハンの思想と通底し、それを拡張する可能性を持つ。

「探索の原理」は、医師や歯科医師が探り針で体内を探索する様子を範例にする。探り針がそうであるように、使用時の道具は身体の「延長 extension」になる。マクルーハンの思想は1970年に完成したマクルーハン流の「探索の原理」に集大成する。「探索の原理」の名称から分かるように、「延長」はマクルーハンの理論で重要な役目を担う。しかし、マクルーハンの「探索の原理」は三つの段階で構成されており、「延長」は、使い古されたことば（クリシェ）を手がかりにして身体内部のアーキタイプを形成する第一段階、アーキタイプに働きかけて新しいことばの言挙げを促す第二段階を経た後、新しいことばを表出してメディア環境を探索する最終局面で登場する。マクルーハンがこうした迂遠な手続きを必要としたのは、道具を使用する状況は直接記述できないと考える間接知覚論者だったことに起因する。マクルーハンは、ポジティブフィードバック、魚と水、バックミラーなどの比喻を用いて前方のメディア環境の不可知性を強調した。水に適用している魚が水を認識できないように、目先の安楽と利益を求める人間にもメディア環境は認識できない。メディア環境に適応しきった人間は、機能の拡張を至上命題に人工物を産出し続けるポジティブフィードバックループの一部になっている。人間は、猛スピードで走行する車に乗っているながら前方の景色から目を逸らし、バックミラーに映った後方に流れる景色として次々と人工物が産出される様子を眺める情況に甘んじている。このような不可知論を与件に編みだされたのが、マクルーハン流の「探索の原理」だった。人工物についてのクリシェは適応の結果の人工物と同じループを描いて表出される。まずはそのようなクリシェを廃棄し、次にクリシェを磨き直して悪循環のループを対象化する力を持った新しいことばを手に入れる必要がある。マクルーハンは、最後に新しいことばを口にだすことで、探り針が身体の延長になるようにことばが心の延長になり、前方のメディア環境で人工物を使用する時と同じ効果が得られると考えたのである。

「延長」とともにマクルーハンの「探索の原理」を支えるのは、第一段階と第二段階で重要な役割を担う「外化」の extension である。「外化」とは、レンズと水晶体の関係に見られるように、内的な身体機構が体外に投射されたものとして技術を捉える概念で、「延長」とは別の系譜に属する。「外化」は、E・カップらの技術論で知られるが、C・ベルナルらの医学思想にも登場するように、本来は、生体に働きかけて分泌物等の外化を促し、外化したものを手がかりに体内の状態を推測するというヒポクラテスの医術に起源がある。外化の技術は、今日では、非侵襲的に体内を表象する医療技術に進歩を遂げた。特に脳の画像化は、環境からの様々な影響を可視化する方法として医療以外の研究にも応用されている。「外化」は、メディア論がfMRI等を駆使する脳科学の一部門として展開する可能性を示唆する。人工物を使用する最中の脳の変化を記述できる技術の応用は、マクルーハンが指し示すメディア論の展開の一つに数え上げられるべきものである。

他方、ギブソンが指し示すメディア論は、道具を使用している時の内的状態を「外化」させて

記述する研究とは相容れない。それは、ギブソンが、外部の実相とそれを写す内部の仮相という  
ような二元論を退け、生物の行為と環境の関数関係を記述する生態学を志向したからである。で  
は、「延長」のみで成り立つギブソンの「探索の原理」からはどのようなメディア論が構想できる  
だろうか。アフォーダンス理論の概要が示された『生態学的視覚論』には、使用時のハサミの記  
述から説き起こし、「延長」の議論がより大きく複雑な人工物にも適用できると書かれている。ア  
フォーダンス理論では、身体という別の物質の「延長」になった人工物の特性は、人工物の中  
ではなく、身体を包摂する環境によって規定される。環境は、生物に対して当該身体に固有の行為  
をアフォード（可能に）する。人工物をつくり出し、場合に応じてそれらを使い分ける人間は、  
極めて可塑的な身体を持つ生物種だと言えるが、そのような人間の行為も、環境にアフォードさ  
れていることには変わらない。その都度身体を変える人間の行為は、その都度行為をアフォード  
する環境の特性によって記述される。ギブソンは、「延長」した身体が環境と出会う状況を直接記  
述する方向性をメディア論に指し示すのである。